

新しいエコシステムの時代



日本アイ・ビー・エム 特別顧問
(元日本銀行理事)

衛 藤 公 洋

日本フェンシングの挑戦

東京2020、男子エペ団体で金メダルを獲得した日本フェンシング。発祥国フランスを大逆転で破った準々決勝はじめ、他の種目も含めて胸が熱くなる試合の連続だった。

昨年末に関係者の話を聞く機会があった。競技人口6千人の日本が層の厚い強豪国に打ち勝つ力をつけてきた背景に、歴代の選手、関係者の努力の積み重ねがあったのは間違いないが、五輪の更に先も見据えて競技を持続的なものにしていく明確な戦略と方法論があることに感銘を受けた。フェンシング協会は、その中核となるミッションを、競技を取り巻く全ての人々への感動体験の提供、に置いている（「突け、心を。」）。

エコシステムとしてのスポーツ

スポーツ競技は一つのエコシステムだ。選手、強化・育成に携わる関係者、そしてファンや観客。競技水準が上がれば、関心が高まって潜在ファンや次世代選手が掘り起こされ、更なる競技水準の向上に繋がる。その「循環」の中で、自己強化のメカニズムをどう創り出し、持続させていくかはどの競技にも共通する課題だ。違うのは、循環のどこにフォーカスするのが効果的かという点だろう。

フェンシングの場合、まず見てみる、やってみるのところにハードル